



1 普賢岳から噴き出す噴煙 (H3年2月) 2 全国からの救援物資 (H3年7月) 3 天皇后両陛下のお見舞い (H3年7月) 4 土石流による被害状況 (H3年)  
 5 自衛隊協力による土のう構築作業 (H5年3月) 6 深江町民センターで学習する高校生 (H5年4月) 7 火砕流発生 (H5年9月)  
 8 火砕流による灰がふもとに押し寄せる様子 (H5年9月) 9 火山灰降灰の状況 (H5年7月) 10 仮設校舎へ登校する大野木場小児童 (H6年7月)  
 11 旧大野木場小学校被災校舎 (H6年11月) 12 自衛隊災害派遣終了 (H7年12月)

特集

噴火災害の記憶をつなぐ  
あれから30年



火砕流により被災した旧大野木場小学校

1990年(平成2年)11月17日、普賢岳が噴煙を上げ始め、198年ぶりに噴火活動を再開しました。翌年の5月に突如として溶岩ドームが出現。その姿は日ごとに大きくなり、6月3日、大火砕流が発生し43人もの尊い命が失われました。深江町大野木場地区に避難勧告が出され、364世帯、1,484人が避難。ここから辛い避難生活が始まります。避難勧告から警戒区域設定へと引き上げられる頃には火砕流が頻発し始めます。火山活動による被害が発生する恐れのあるほかの地域にも避難勧告や警戒区域が設定された後、6月30日に水無川で大規模な土石流が発生しました。

この後も長い避難生活が続きますが、一方で復興へ向けての取り組みも進められました。その間、全国各地からの多くの救援物資や義援金などの温かい支援が寄せられました。被災校舎は砂防ダム建設予定地となり、撤去される予定でしたが、昔から地域の人に親しまれてきた校舎の存続を地元住民が切望。校舎には保存するための工事が施され、今も噴火災害の脅威を無言で伝え続けています。



火砕流発生の様子

噴火から終息まで

- 1990年(平成2年)
  - 11月17日 普賢岳198年ぶりに噴火
  - 5月20日 溶岩ドームが出現
  - 5月24日 初めての火砕流発生を確認
  - 5月29日 政府が「災害救助法」を適用
  - 6月3日 大火砕流により島原市で43人が犠牲
  - 6月6日 大野木場地区全域に避難勧告(364世帯、1,484人)
  - 6月8日 大野木場地区を警戒区域へ
  - 6月9日 大規模火砕流発生(建物19棟焼失)
  - 6月20日 瀬野地区が警戒区域へ
  - 6月28日 諏訪地区の一部が警戒区域へ
  - 6月30日 仮設住宅への入居開始
  - 7月10日 大規模土石流発生(水無川・赤松谷川)
  - 7月10日 天皇后両陛下が避難住民をお見舞い
  - 7月31日 深江小学校・大野木場小学校・深江中学校の仮設校舎が完成
  - 9月15日 大火砕流発生(建物153棟、大野木場小学校校舎・体育館焼失)
  - 10月28日 深江小学校・深江中学校が元の校舎で授業再開
- 1991年(平成3年)
  - 3月19日 大野木場小学校が深江町民センターで卒業式
  - 8月8日 台風10号により水無川で土石流が発生し住宅などに被害
- 1993年(平成5年)
  - 4月12日 島原市内に「雲仙復興工事事務所」が開設
- 1995年(平成7年)
  - 9月19日 水無川上流で無人化工法による遊砂地建設に着手
  - 11月10日 天皇后両陛下が御訪問(旧大野木場小学校ほか)
  - 12月16日 陸上自衛隊島原災害派遣隊が派遣業務終了
- 1996年(平成8年)
  - 5月20日 溶岩ドームを「平成新山」と命名
  - 6月3日 噴火活動の終息宣言
- 1999年(平成11年)
  - 2月20日 一般国道57号島原深江道路全面開通
  - 4月1日 土石流被災家屋保存公園が開館
  - 道の駅「みずなし本陣」が開館
- 2000年(平成12年)
  - 2月22日 大野木場小学校新校舎が完成
- 2001年(平成13年)
  - 3月20日 水無川導流堤が完成
- 2002年(平成14年)
  - 9月15日 大野木場砂防みらい館(大野木場監視所)が開館